

「日本写真保存センター」調査活動報告(19)

敗戦そして海外での眼差し 一収集・保存した写真原板から一

松本 徳彦(副会長)

ここにきて「写真保存センター」の活動内容が写真家や遺族(著作権継承者)の方々に、理解されるようになって、「お祖父さんが撮ったこんな時代の写真原板があるのですが」といった問い合わせや、歳をとり働けないが「これまで撮ってきた写真を残したいがどうすればよいか」といった電話や手紙での問い合わせが多くなってきた。ありがたいことだ。

保存センターでは、撮影年代や内容についてお尋ねし、可能な限り収集が図れるよう対応している。大切なことはその写真が「いつ、どこで、どんなものを写しているか」をお聞きし「寄贈の有無」を確認して、委員会に諮って収集の手続きを取るようにしている。

渡辺義雄(1907~2000)

写真界の重鎮としてJPSの会長職を25年間も務めた渡辺義雄の主要な作品の写真原板を収集した。代表作の「伊勢神宮」から「宮殿」「迎賓館」「帝国ホテル」などと「奈良六大寺」「大和古寺」などの壮大な寺院建築をとらえたモノクロ、カラーの写真原板(4×5、5×7、8×10のフィルムと乾板)の数々。それと戦後海外渡航が許可されて世界平和評議会(1956年コロンボで開催)に招かれて撮った、アジア諸国とイタリア、モスクワなどの35ミリモノクロフィルムなども収集した。

渡辺は1907年新潟県三条市で生まれ、県立三条中学校を卒業して上京、25年、小西写真専門学校(現東京工芸大学)に入学。学生時代から各種の写真展で第1席、特選を受賞する。28年、卒業後オリエンタル写真工業の写真部に入社。ガラス乾板の製品テストで腕を磨き、当時先端的な写真表現で話題を呼んでいた木村専一が主宰する「新興写真研究会」に参加(30年)。『フォトタイムス』の編集に参加し、〈カメラワーク〉と題するシリーズで「レビューを見る」「カフェを見る」「サーカス」「ダンスホールを見る」「浅草を見る」(32~34年)など都会の風俗を小型カメラでスナップした写真が話題となり、「新興写真的代表的な作品」と呼ばれた。近代化しつつある都市 イタリア フィレンツェにて



恋人 フィレンツェ 1956年

生活に目を向けることを提唱した美術史家の板垣鷹穂の示唆を受けて撮ったのが「御茶の水駅」(33年)で、駅舎の白く輝くコンクリート壁と影のコントラスト、その抽象的、幾何学的な構成で表した写真が建築写真的代表例として扱われた。

戦後、渡辺は戦中の軍や情報局と関係の深かったことを反省して、母校の東京写真専門学校の教職を断り、また社会的に影響のある仕事にもつかず、しばらくは静観していた。(『アサヒカメラ』50年5月号)。そんなこともあって戦後の復帰は50年頃からと遅かった。折り目正しい律義さが信頼感を生み、公的な要職を長らく務めることになる。

本誌では「伊勢」「仏像建築」関係の作品はすでに定評があるので、56年に撮影した「イタリアの旅」からの作品を掲載することにした。はじめて見るイタリア人の享楽的、官能的な暮らしぶりに驚いた様子が感じられ、カメラの眼も新鮮な驚きを詩情豊かに表現している。

なお、この度の寄贈はご子息の一雄氏が急逝され、継承者が姉の中島ちえ子さんに移り実現したもので、伊勢神宮、宮殿、奈良六大寺大觀など膨大な写真原板が、作品とともに保存センターが管理することになった。

菊池俊吉(1916~1990)

1916年岩手県花巻市に生まれた菊池は、オリエンタ

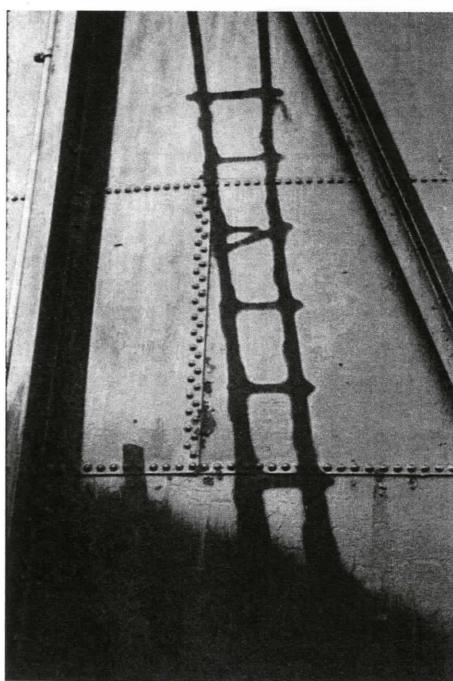


被爆した少女 1945年

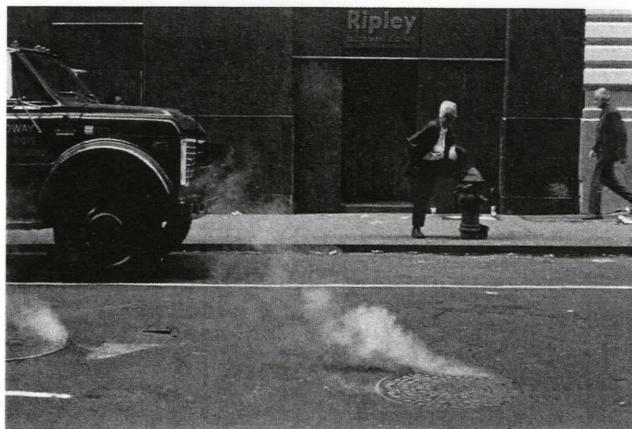
ル写真学校を卒業後、東京光芸社を経て、41年外宣伝機関の東方社に入社。デザイン、印刷技術の粋を集めて制作された豪華なグラフ誌『FRONT』の撮影に従事。竹槍訓練、銀座の空襲など戦時下の日本を撮影。敗戦後改組した文化社で、45年原爆災害学術調査団の医学班に同行して広島を訪れ、被爆者の医療現場や被災した家並みなど科学的資料となる写真を数多く撮影している。

進駐軍向けの写真集『東京 1945 年・秋』(1946 年) や広島県観光協会の依頼による『LIVING HIROSHIMA』(1949 年) の撮影をする。さらに、空襲で焦土と化した東京で栄養失調となった戦災孤児たちや、闇市に群がる民衆、銀座四丁目の服部時計店に生まれた進駐軍兵士用の PX の賑わい。戦勝国と負けた国との落差をとらえる。荒廃から復興への歩みを始めた日本の新世紀の一断面が写し出されている。鈴なりの都電に米国産の乗用車と物量の差は歴然と目にする。敗戦直後のニッポンを事実を誇張することなくあるがままに素直にとらえたドキュメントである。記録に徹した眼は的確である。

保存センターには「知っていますか—ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾」展で使用した、被爆者の医療現場を捉えた一連の白黒フィルム 14 本 (433 コマ) を収集している。



原爆で焼きついた影 1945年



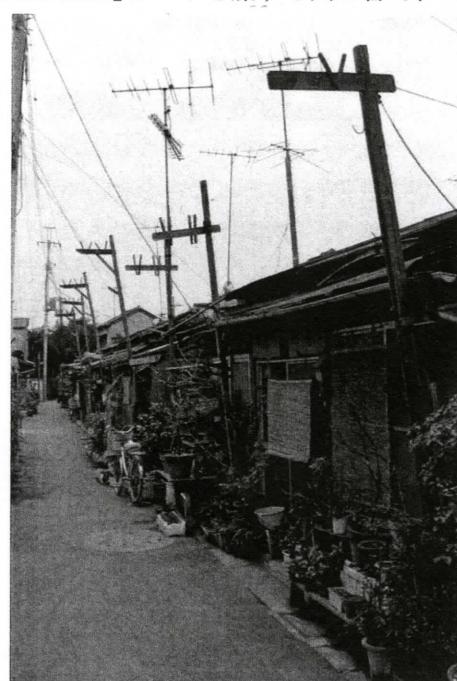
『Maybe maybe』より 1971年

稻越功一 (1941 ~ 2009)

1941 年岐阜県高山市で生まれた稻越功一は、武蔵野美術大学を中退後、61 年モス・アドバタイジング社でデザイナーとして活動を始める。70 年フリーとなり、イエローを設立。歌手の沢田研二、矢沢永吉から女優の浅野ゆう子、沢口靖子、大谷直子など、歌舞伎役者、文士、音楽家、芸能人、スポーツ選手などと多彩な人物写真を手がけ、写真集に仕立てている。

さらに世界を旅して、異色の都市空間、印象を映像化した写真とエッセイを組み合わせた作品群がある。

フリーになって間もなくに出版した処女作『Maybe, maybe』(71 年) は、ニューヨークの街角でスナップしたもので、その画像は広告写真のようであったり、コンポラ写真のようであったりと、イメージの交錯する不思議な映像空間が話題となった。また 87 年の『記憶都市』は東京近郊のなにげない光景を静的、シリアルスな眼差しで捉えた虚無的空間が描き出されている。89 年の『PARIS 1989』はパリを旅する人の目で、パリの街々の石畳やセーヌの水面、天使の彫像といった誰もが目にしてきた光景を映像化したもので、ここにもデザイナーの感覚的な表現が見られる。収集したフィルムは 5,363 本と多い。



『記憶都市』より 1987年